

研究所訪問

鹿児島県衛生研究所

Kagoshima Prefectural Institute of Public Health

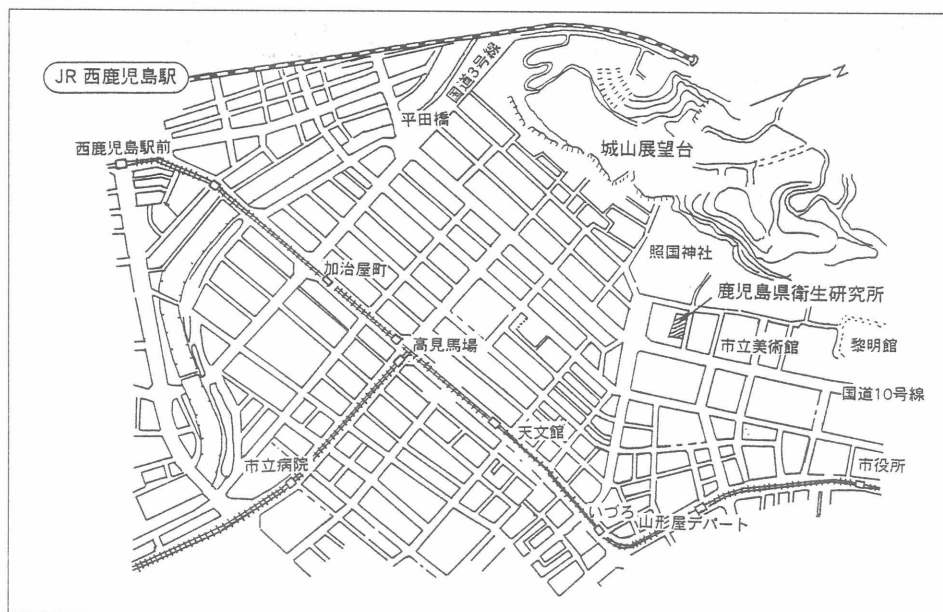


図1 研究所の名称および所在地
 鹿児島県衛生研究所 〒892-0853 鹿児島市城山町1-24
 Tel.099-224-2612、Fax.099-224-2614



写真1 鹿児島県衛生研究所

血鹿児島県衛生研究所(東郷正美所長)は「衛生試験所」(設立年は不明)としてスタートし、戦災により昭和20(1945)年に焼失し、旧伊敷村の旅団指令部跡(現鹿児島市下伊敷町玉江小学校付近)を仮試験場とし業務を続けたが、昭和24(1949)年10月に「鹿児島県衛生研究所」に改称し、現在地(鹿児島市城山町1-24)に設置された。その後、鉱工業活動に伴う公害が社会問題化し、昭和46(1971)年7月「公害衛生研究所」に改組された。さらに、組織拡大に伴い昭和57(1982)年5月に

公害研究部が鹿児島県環境センターとして分離独立し、再び現在の名称となった。鹿児島県衛生研究所は、図1に示すようにJR西鹿児島駅から徒歩約10分の鹿児島市の標高約100mの城山下にある。

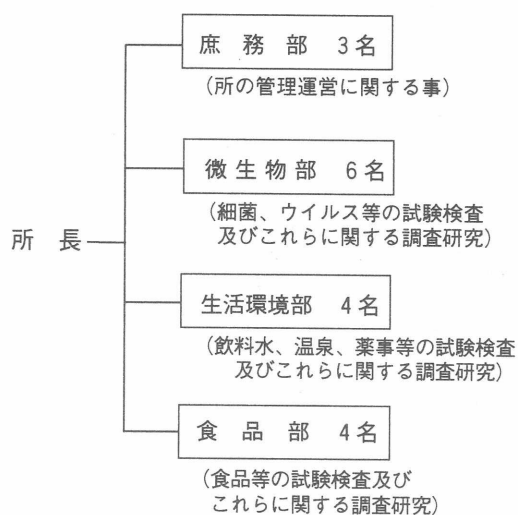


図2 組織及び主な業務



写真2 鹿児島県衛生研究所生活環境部スタッフと筆者
左から上村忠司(主任研究員)、福留 充(部長)、
須納瀬 正(主任研究員)、平瀬洋一(主任研究員)、筆者

近くには島津藩77万石の居城であった鶴丸城跡[現在、県の歴史資料センター(黎明館)]があり、鹿児島の生い立ちから現在までの郷土の歴史や文化遺産などが豊富な資料でわかりやすく展示されている。

本研究所は、県民の公衆衛生の向上及び健康の増進を図る目的で、鹿児島県が設置している調査研究機関であり、衛生研究のほか、特に温泉に関する総合的研究を目的として設立された。建物は、鉄筋3階建て、延べ面積は2,096 m²であり、生活環境部はその3階にあり、周囲の緑とマッチした落ち着いた雰囲気の中にある。

研究所の組織は4部制(庶務部、微生物部、生活環境部、食品部)で職員は18名(所長を含む)で構成(図2)され、図2に示す業務が行われている。

温泉部門を担当する生活環境部は、部長を含む4人体制で業務が行われている。主な設備としては、ICP(誘導結合プラズマ)発光分光分析計、ガスクロマトグラフ質量分析計、イオンクロマトグラフ、高速液体クロマトグラフなどの最新鋭の分析装置が装備されている。

生活環境部では、温泉水や地下水などの調査研究を行うとともに依頼分析にも応じている。現在継続している研究は、県内の温泉地の中から6箇所(丸尾、新川溪谷、桜島、垂水、喜入、指宿)を選定し、それらの温泉水の化学組成の変動を明らかにすることである。また、最近

の健康志向などから飲む温泉水(ミネラルウォーター)ブーム(県内には約30事業所が稼働中である)などからガス質量分析計などによる農薬等の化学物質による汚染状況を把握する研究が行われている。

鹿児島県は、泉源数約2,700本(全国2位)、湧出量約200 m³/分(全国3位)の温泉資源に恵まれた温泉県である。温泉は、公衆浴場、ホテルや旅館の浴用に主に利用されているが、病院や老人ホーム、福祉センター等の浴用や、一般家庭への配湯も近年増えて来ている。また、清涼飲料水としての販売も行われている。その他、温泉熱の活用として、ハウス園芸や水産養殖、ホテル等の施設冷暖房にも温泉が利用されている。

近年、温泉利用許可申請に必要な温泉中分析のほとんどは、県が基金を拠出して設立された財団法人鹿児島県環境技術協会、鹿児島県薬剤師協会で行われるようになり、当研究所の一般依頼の温泉分析件数は急激に少なくなってきた。しかしその反面、県民の飲料水である水道水源(地下水)中の

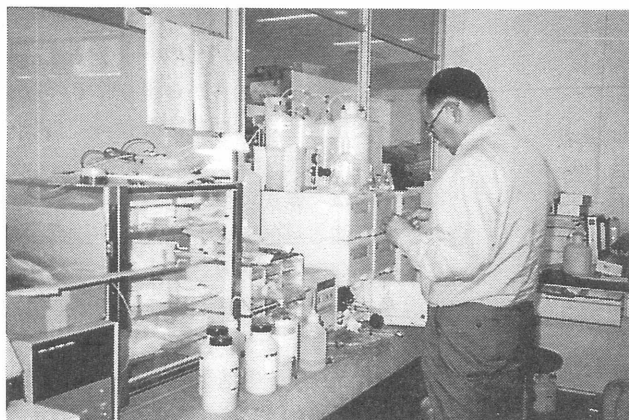


写真3 イオンクロマトグラフを用いた温泉水の分析

かにし、温泉行政上の基礎資料として役立てるために「鹿児島県の温泉」[昭和38(1963)年～46(1971)年、その後平成2(1990)年～7(1995)年改定]を発行した。この出版物は、県内の温泉の保護と適正利用及び温泉開発に役立てるための資料として温泉井戸の現況の把握と予測を目的として作成されたものである。

現在、鹿児島県では2ヶ所(山川伏目[平成7(1995)年]、霧島大霧[平成8(1996)年])で地熱発電所(いずれも30,000キロ/時)がすでに稼動している。地熱発電による温泉井戸への影響をモニタリングする目的で、温泉水位の状態を調べるために水位計による常時監視が当該地区保健所職員の協力のもとで実施されている。

鹿児島県の温泉関係の研究的な仕事を一手に担当しておられる上村忠司氏を中心としたスタッフの奮闘と、鹿児島県衛生研究所の今後のますますの発展を期待したい。

鹿児島大学理学部地球環境科学科

坂元 隼雄

トリハロメタンなどの有機系溶剤などによる地下水汚染が注目されるようになり、それらの分析業務量が増加しているとのことである。

一方、地下水を中心とした調査研究は鹿児島県衛生研究所から独立した前述の別組織の鹿児島県環境センターでも行われている。したがって、当研究所では必要最低限の人員で生活環境関連業務が行われている。

また、鹿児島県の温泉の行政に係わる生活衛生課では、県内の主要温泉地域における温泉源の本質を明ら